

2017年度は9人体制で検査室の運営を開始したが、8月中旬から1名産休・育児休業となり、その補充の為に医局秘書として従事していた職員が8月1日から臨床検査技師として検査室へ異動した。

検体検査と生理検査間でのローテーションも順調に機能し、結果、検査室内のカバーリング体制が充実した。それにより有給休暇などを取得しやすい環境となり、さらに2名の技師を時短勤務へ変更する事が可能となった。

出前健康講座では「食中毒に気をつけましょう」と「閉塞性動脈硬化症とフットケア」のテーマで講演した。また看護師を中心としたミニレクチャーも、例年同様に4つのテーマで開催した。次年度は内容を増やして開催したい。

【検体検査】

免疫学的検査や特殊生化学検査などは、熊本病院と同価格で外注依頼しているが、2017年度に契約の見直しが予定され、約16% (134万円) の外注費増加が予想された。しかし細菌検査を中心に契約単価の交渉を行い、約10% (84万円) ほどの増加に抑える事ができた。

保険未記載の外注検査が複数件依頼されており、医師への情報提供を行い、協力をお願いした。

前年度の病院機能評価で指摘された、ホルマリンの環境測定は、年2回で実施した。また使用するホルマリンは原液からの調整などは行わず、調整済みホルマリンを使用する事により、作業時のホルマリン濃度も「適切でない」から「なお改善の余地」へと1ランク改善した。

2017年度の検査件数は、外来入院共に若干減少した。

【生理検査】

数年来実施してきた研修の成果により、心エコーは4人体制、腹部エコーは3人体制となった。さらに他の領域も充実した体制を構築していく。

超音波診断装置Aplio50の経年劣化に伴い、後継機種としてAplio500を11月より導入し、今までは症例によって使用する機種に制限が生じていたが、導入に伴い解消され、患者待ち時間の短縮に繋げる事ができた。また画像や機能が改善された事によって、病変の見落としの減少や、新たな項目(組織硬度や低流速血流など)が測定可能となった。

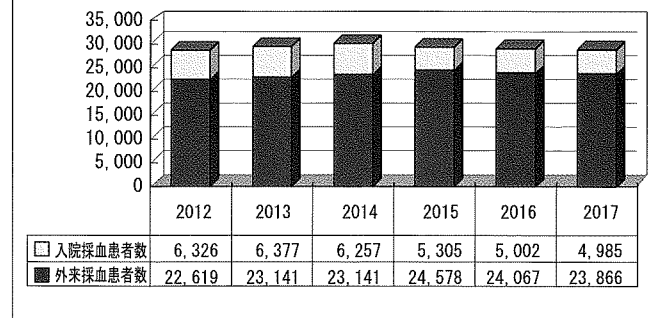
2017年度の検査件数は、僅かながら増加した。

【今後の展望】

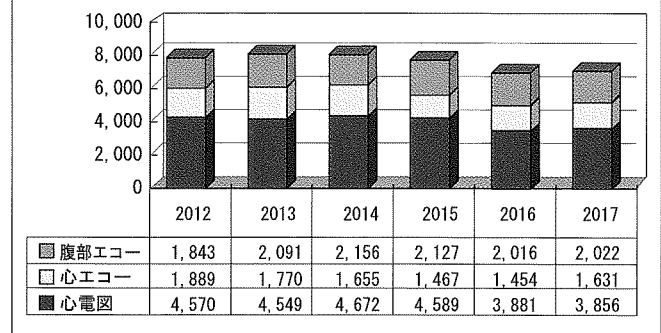
育児休業者の復帰による、人員配置の再検討が必要である。検査室全体のカバーリング体制のさらなる充実による、休みの取りやすい就業環境を整備していく。

数年来の懸案事項である、近隣医療施設からの依頼検査を受諾出来るように、院内の体制を整えたい。

採血患者数年度別推移



主な生理検査年度別推移



病理・細菌検査年度別推移

